

CAMD セミナー

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

タウオパチーの画像診断を目指して “タウモデルマウスの画像解析を中心に”

放射線医学総合研究所・分子イメージング研究センター・
分子神経イメージング研究プログラム・脳分子動態チーム

佐原 成彦 博士

平成 25 年 11 月 20 日(水) 午後 4 時 00 分～
第 1 研究棟 2 階会議室

超高齢化社会を突き進む我が国では老年性認知症患者の増大は大きな社会問題となっているが、老年性認知症の半数以上を占めるアルツハイマー病の根本的治療法は未だ確立していない。 β アミロイドを標的とした治療薬開発が成果をあげられない中で、アルツハイマー病のもう一つの病理像・神経原線維変化の主要構成成分であるタウ蛋白を標的とした治療戦略が注目を集めている。認知症におけるタウ研究はアミロイド研究を追従する形で進んできた。家族性前頭側頭型認知症においてタウ蛋白遺伝子変異が発見されたことを契機にヒトの病態を反映するタウモデルマウスが数多く報告されるようになった。病態の本体が細胞内凝集沈着物である神経原線維変化ではなく前駆体構造物としてのタウオリゴマーであるという仮説や、異常凝集タウ蛋白伝播による病変拡大というプリオン仮説が提唱され、さらにはタウ抗体療法の試みも行われている。一方で、治療薬開発を目的とした病態診断法の開発研究も、生体脳マルチモーダルイメージング技術の進歩で少しずつ成果が上がり始めている。本発表では私が行ってきたタウモデルマウスの画像解析成果を中心に、タウ研究の現状と将来の展望について議論したい。

連絡先: 認知症先進医療開発センター
NC・企業連携共同研究部
吉田裕孝(内線 6303)